

阿波市「阿波町・吉野町」の暮らしの変遷

—行事と食—

民俗班（徳島民俗学会）

澤田 順子*

要旨：平成17年阿波町・市場町・土成町・吉野町の4町が合併して阿波市が誕生した。その西端の阿波町と東端の吉野町が今年度の調査地である。昨年度の調査地は隣接する美馬市美馬町であった。その折「この辺りには「いろいろ文化」はない」と聞かされたが、阿波市のこの2町も南面に四国最大の河川吉野川と北側に阿讃山地を背にした太陽の降り注ぐ土地柄である。しかも吉野町には山はなく、阿波町にも高い山はない。乾燥した扇状地ではあるが、水さえあれば恵まれた地域である。人々はどのような暮らしをしていたか、暮らしを変えていったものは何であったかを、「行事と食」を調べることで両町の暮らしの変化を探ろうと聞き取り調査を行った。

キーワード：各家庭で、地域住民共同で、子どもの連帯

1. はじめに

徳島藩2代藩主忠英が、郷士たち^{ただてる}に阿波郡近辺の荒地を開墾させ、禄として領地を与えることで、郷士たちの経済基盤を作った。原土制度という。原土は阿讃方面の警備を担い農業・文武に励み有事になれば出陣する藩直轄の家臣団であった。今も吉野町には原土屋敷が残っているし、原土の子孫も健在だ。

吉野川北岸のこの地方一帯は農業が中心産業だったが、乾燥地のため粟・稗・黍・麦・豆など5穀を栽培する畑作地帯だった。

その後吉野川北岸一帯は藍の栽培が奨励され、両町でも盛んに栽培された。明治32年をピークに藍の需要が減りはじめ、藍作は衰退、それに合わせるかのように大旱魃が明治37年（1904）に起こり畑作が大きな被害を受けた。統計によると明治40年代には藍は減り養蚕用の桑や稲作が増加している。

阿波町の半分は山地である。雨量が少なく乾燥した土地柄で水不足に悩まされていた。そのためタメ池が沢山作られている。吉野川に向かって下る扇状地形を利用し、讃岐山脈を水源に水を集めていった。

久勝地区^{べつそういけ}の別埜池は県下一の大きさと110ヘクタールもあるタメ池だ。次々と水を確保するため、市場町・阿波町を併せると2000ものため池があったというから驚きだ。その他にも狭い耕地用に野井戸が3000も掘られていたそうだ。

しかし、山地では取水が遅れ、阿波用水が引かれるまでは麦・サツマイモの生産を主とした。

一方、吉野町でも藍の衰退、桑もだめとなると畑作中心の暮らしから米作への転換の機運が近隣一帯に広まり、吉野川からの自然取水と用水路が取り沙汰されるようになった。揚水ポンプの利用が考えられ柿原村（吉野町柿原）から水を引き東に向かった用水路（板名用水）を端緒に水利用が進み稲作が盛んになった。吉野町にはタメ池はない。

聞き取りを行った人たちの話によると、第2次大戦前後の供出の厳しい時代も、主食は麦中心だったが食べるものに事欠くような苦しさはなかったそうだ。隣の土成町からの嫁入りが多かったのも米が取れるからだという（吉野町）。

昭和43年阿波用水が完通し両町ともに豊富な水が行き渡り米作が盛んになった。今度は食生活の欧米

* 徳島市丈六町長尾62-8

化で米離れとなり、米の過剰時代となった。現在ではレタスなど畑作園芸が盛んになっている。

阿波町・吉野町で行われている行事や食の状況は似通っているの、以下両町をまとめて報告することにした。

話し手は70代の人を中心であり、聞き取りの内容も高度成長期で人々が流出してしまう前の様子である。現在では明らかに行われていない事柄には注釈をつけることにした。

2. 家庭行事

1) 正月

(1) 元旦

除夜の鐘の音を聞くと氏神さんにお参りする。家長は歳徳神（お正月さん）をお迎えして（白紙や白扇に）神棚（床の間に特別にお棚を作る家もある）にお遷しする。天照大神を中心に氏神さんと信心している神さんの掛け軸が掛けられ、三宝にはウラジロを敷いた鏡餅、干し柿、山海の珍味を載せお祭りする。飾り物を付けた柳や松が飾られている。

家長は若水を汲んでくる。その水を使って家族が顔を洗い、年迎えの雑煮など祝いの支度をやる。

家族全員で神棚を拝み、三宝の上の干し柿を1つずついただき席に着く。新年の挨拶を済ますと、お茶が出て柿を食べる。この柿を歳取り柿と言い、一つ食べると一つ歳を取るといわれていた（注 今ではあまりされなくなった）。

雑煮は自家製の赤みそ（ねさしみそ）仕立てが多い。大きい切り餅（丸餅も）・ジイモ（サトイモ）・ダイコン・ハクサイなどを入れる。

煮しめ ダイコン・ジイモ・コンニャク・レンコン・コウヤどうふ・シイタケ・チクワ・かまぼこ・昆布など家により異なる。黒豆、数の子、塩魚など。年々自分流が多くなり、正月料理の形式・種類は自由になっている。

(2) 節 年賀 正月礼

株内、親族の年賀の挨拶。あらかじめ話し合って日を定めお互いに招待をしあう。お吸い物（そばごめなど）、煮しめ、数の子、三つどんぶり（三つ重ねで揃いの鉢）には、おしたし、なます、さかなの煮付けなどを盛り付け、巻き寿司、赤飯等をサカナに酒を出し一族の交流を深めた。

『民俗学辞典』(昭和26年刊柳田國男監修P, 315)によると「あらゆる節句の中で重視されたのは正月

の節である。これを特にオセチというところは多い…。松の内に日を定めて酒宴を催すこと、つまり徳島地方でセチ客というものをオセチということもあった」とある。他地方にはない珍しい行事と思われる（他町の調査でも「節」は聞いていない）。

(3) 7日正月 七草

3ガ日と同様に仕事をしない。畑の野菜7種を採って来て7草粥を作った。

(4) 11日 お帳とじ

かつて、買い物は掛け買いで、年に2回の節季（盆と大晦日）に支払いをしていた。今は行っていないが、お帳とじは新しい大福帳を作ることだった。この日にぜんざいを食べるしきたりは残っている。

(5) 15日 正月送り あがり正月

家長は神棚の供物を下げ、三宝に入れていた米で粥を炊く。「今はお粥しか食べられんけど、ご飯が食べられますように」と言ってカヤの茎の硬いところで作ったハシで粥をすくい縄に刺して門に吊るす。神棚にお供えしていた柿と鏡餅を食べる。

「子どもにお鏡の上の方をを食べさせたら大きくならん」と鏡餅の下の方を子どもには食べさせた。

家長は歳徳神を氏神さんに送り届け、注連縄など正月飾りも氏神さんに納めた。神主がそれを焼いた。皆が集まって燃やすことはしていない。

2) 2月3日 節分

立春の前日 新しい季節を迎えるに当たって邪気を祓い福を迎える行事。入り口に鬼の目つきのヒイラギの枝を立てイワシの頭か丸ごと刺しておく。家長が炒った大豆を枡に入れ「鬼は外 福は内」と言いながら豆をまく。家族は年の数だけ豆を拾って食べた。ダイコン・ニンジン・アゲ・コンニャク・ゴボウを入れた（注 家によって違う）カキマゼ寿司を造る。節分にコンニャクを食べるとお腹に溜まった石や砂を下ろすことができるといわれている。「晩飯を早い時間に食べる。遅れたら1年中晩飯がおそくなると言われた。この日に食べた焼いた塩イワシがおいしかった」

3) 3月3日 節句 ひな祭り

旧暦の3月は農作業の大切な季節で、雛人形を神かたしろの形代と考え祀るのが発祥である（民俗学辞典）。

女兒のいる家では節分が済むと大安の日に雛人形を飾り、菱餅やアラレ、ウイロ・巻きずしを供える。ワケギやハマグリはお雛さんのご馳走。3日の夜早々に、娘の縁付きが遅くなるからと片付ける。

4) 3月4日 四日の悪日しかあくにち

旧3月4日は仕事をしてはいけない物忌みの日で遊山や遍路に出かけた。花見の時期でもあり、遊山について『広辞苑』に徳島の遊山についての記述がある。

阿波町では全町あげて若者が切幡寺でお接待をした。あらかじめ町内で集めた米でもちを作り、日用品を買って切幡寺の参道で接待していたという。お札に貰ったお札を地域の太子堂やお庵に奉納した。

5) 彼岸

春・秋の彼岸は、先祖をまつる行事。中日には仕事を休み、5ヵ所参りや市場町の第十番札所切幡寺にお参りに行った。ぼた餅を作り仏前に供える。

6) 5月5日 端午の節句

4月に入ると大安の日に鯉のぼりを立てる。初孫のときはチマキを作って配る。ガラタツ(サルトリイバラ)の葉で練りこみ(餡と糯・米粉を交ぜる)を包んで柏餅とした。菖蒲湯に入り、ショウブとヨモギを屋根に載せ、災難除けにした。赤飯を作る。

7) 7月6日～7日 たなばた 七夕

各家で笹竹に願い事を書いた短冊を吊るし、お供えをしていたが、今は学校や保育所などで七夕行事をするだけで、家庭ではほとんどやっていない。たなばたは紋日で、農作業は休む。ソラメ餡のダンゴとカキマゼ寿司が決まったご馳走だった。

七夕の星に供えた季節の野菜や笹も、吉野川へ流すことができなくなった。七夕に墓の掃除をする。

8) 8月13日～15日 盆 盂蘭盆

両町では仏教徒が多く、真言宗と浄土真宗が多い。真言宗では盆に住職が棚経といって1軒ずつ檀家を回って祖霊を拜む(真宗は報恩講が12月にある)。

祖霊を迎える準備は、花を入れる青竹の花筒と迎え火に使う肥え松など。初盆を迎える家はミズダナ(竹で作った棚)にハスの葉を敷き、供え物を置く。その前で肥え松を焚く。

14日迎え火、肥え松を焚いて仏を迎える。米粉のダンゴ・カキマゼ寿司・そうめんの束を供える。この日は仏さんの盆で精進料理。仏さんの一番のご馳走はそうめんとうどん。家族も食する。

15日は人間の盆といって休養日

親族などへ盆礼に回り、そうめん・うどん・果物お菓子などを仏に供える。盆礼に来た客にはそうめん・きゅうりもみなどで簡単にもてなす。

16日 送り団子を供え、肥え松を焚いて仏を送る。

ガキ仏さんにもとダンゴなどの残り物を供えた。お盆の期間には地藏盆や盆踊りがある。

9) 秋の彼岸

春と同様である。

10) おいのこさん(亥の子)

旧10月の最初の亥の日に行われる農家の行事。子沢山の猪にあやかって子孫繁栄と多収穫を願う。

芋餅・カキマゼ寿司を作った。ちょうど取れる季節なので柚子の酢を使った。そこで「オイノコハンはゆう(言うを柚子にかけた)ばかり」,「あの人はオイノコはんや」と言ったりした。

11) おこう 報恩講 おとりこし

浄土真宗では旧11月28日親鸞聖人の命日に信徒が寺に集まって供養する。「ごはんまい(米やお金)」を集め行事の財源とした。

「おとりこし」住職が信徒の家を回り供養をする。そのあと檀家が寺に集まり報恩供養をする。

12) すず払い

12月中旬になると、どこの家でも行っていたが、薪を焚かないのですすがない現在は見かけない。

13) 餅つき

12月26日～28日まで餅つきをする。麦飯が主食のころ餅は大変なご馳走であった。4軒くらいが組になって朝4時ころから夜まで餅を搗く。多いところでは1石も搗く。一人1斗が標準だった。半分は白いモチ(キチうるち〈粳〉とモチ米を混ぜたものをオフク餅という)キビ、アワ、粉にしたイモを混ぜた餅、1年中食べる塩・砂糖で味付けしたオヘギ用(青ノリ、ヨモギなどを入れる)と沢山作った(青ノリは吉野川で採ったもの、ヨモギは虫下ろしになる)。一番の人気は白餅であった。

最初の白餅はお鏡さん用とした。

14) 正月準備

大晦日の昼までに準備する。

門松 平成8, 9年ごろまでは門やに雄松・女松を立てていた。

注連縄 歳徳神としとくしんを祀る棚用(今はやっていない)・神棚・荒神さん・床・玄関や各入り口・馬小屋・井戸・農具・カラ臼・杵など諸道具に飾る。

床の間飾り 三宝の上に浄紙を敷きウラジロ・鏡餅・新米・年取り柿・橙を載せる。お神酒・ご神燈を用意すると歳迎えの準備が終わる。

年越しそばを食べ除夜の鐘を待つ。

真宗は正月飾りをしない。

3. 地域共同で行う行事

豊作を祈るための行事が各地域で行われている。

1) いでさらえ

田の準備をする前に水利組合が日を決め地域総出で水路の掃除をした。作業の後、酒肴で労をねぎらい地域の親睦も図っていた。平成2年北岸用水が竣工し用水に蓋ができたため、水路の掃除はいらなくなり、道路愛護を兼ねて秋に周辺の草刈をしている。

2) お日待ちさん

正月・5月・9月の農閑期に地域の人たちが集まって、神仏に豊作や家内安全を祈って夜明かしをしていた。地域の親睦を深める紋日である。組内の回り持ちで当家を決める。青竹を4本立て神棚を仮設、注連縄を張り巡らし、上段に鏡餅と御幣を祭り、下段に供物を供える。神主を迎え五穀豊穡と家内安全祈願の祝詞を奏上してもらう。夕食はカキマゼ寿司、夜食は煮しめや酒が出て皆で楽しみ、一夜を明かしていた。今は一旦家に帰り、夜があけると再び集まり神主の祝詞の後、飯に味噌汁・漬物の朝食で解散となる。鏡餅の上段は神主が持ち帰り、下の段を当家が切り分け組内に配っている。

上記のような神式と僧侶にお経を挙げてもらう仏式もある。庚申待ちで夜明かしをする講が阿波町大原にあるそうだ(8月18日)。

3) 秋祭り

地域にある氏神さんの祭礼を地域の人たちが主になって行う。収穫を感謝する10月が多い。甘酒・サカナの姿ずし(アジ、ボウゼなど)・巻き寿司・煮しめを作り祭客をもてなす。甘酒とサカナずしが一番のご馳走だった。姿寿司を入れる蓋付きの箱も家庭にある。

4. 子どもの行事

1) お祝いそ(おいわいそう)

戦前まであった行事で、子どもたちの祝いの日だった。旧正月14日の朝、子ども4、5人が組になって袋を提げ「お祝いそ、コトコト」と言いながら近隣の家を訪ねる。各家ではあらかじめ用意していたモチや菓子(しろむぎ、くろむぎという丸い小さな輪になった麦粉で作ったお菓子)などを呉れた。

人から物を貰って歩くのは教育上良くないと、この行事は中止され、今はしていない。

貰った米は分け合い15日朝お粥を炊き歳徳神に供

え、お下がりを戴いた。これを食すると夏病みをしないといわれた。

2) いのこ おいのこさん

旧10月の最初の亥の日を「おいのこさん」という。二股ダイコン、ニンジン、柚子、芋餅、「来年は一杯にできますように」と一升枡の底にカキマゼ寿司を少し入れて神に祀った。

子どもたちはワラで「いのこボテ」を作る。芯にサトイモの茎を入れるといい音がするそうだ。このワラボテで地面を叩きながら「いのこさんの囃子歌」を歌ってもちを貰ったりしていた。この行事も今はしていない。

5. おわりに

阿波町・吉野町の暮らしの変わりようを見てきた。話し手は終戦後の変わりようを見てきている。水不足に悩まされていたこの地域は「阿波用水」「北岸用水」によって県内有数の蔬菜の産地となっている。それにつれ生活様式も変化している。しかも若者は都市に流れ、阿波市全体で1所帯平均3.14人家族の中に65歳以上がいる所帯は55.1%という。

受け継がれている行事(しきたり)は豊作を祈願し、収穫の感謝を表すもの、人々との交流を深めるものであったが、社会の変革は、その込められた祈りを失い形骸化されて伝承されている。何のための行事であるかも理解され難い。また、子どもや若者の行事が無くなっているのは寂しい限りであった。

今回も多くの方にご協力いただいた。板東直道先生には調査のきっかけをつくって戴き感謝している。

調査にご協力いただいた方々のお名前を列記し、お礼としたい。(順不同 敬称略)

阿波町 坂東完治、瀬尾周市、楠 和夫、坂東章智、佐古 明、藤井登喜子、坂東正美、林 直一、新居重治

吉野町 出原とし子、高木幸子、市原俊子、大久保美枝子、三宅和子、大島 博、福田重治・登志子

文献

近藤有地蔵編纂, 1973(昭和48年):『阿波郡史』。

阿波町史編纂委員会, 1979(昭和54年):『阿波町史』。

徳島県郷土文化会館民俗文化財編集委員会, 2002(平成14年):『土成町の民俗』, 2009(平成21年):『日開谷流域の民俗』。

民俗学研究所編, 1951(昭和26年):『民俗学辞典』。